

---

# ワンダーランド・ファンタジー

梶城藍子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワンダーランド・ファンタジー

### 【Nコード】

N8129M

### 【作者名】

梶城藍子

### 【あらすじ】

天真爛漫なビィとその弟ラズの不思議の国の冒険を描きました、ファンタジーです。

タイトルは今考えたので、あまり本作とは関係ありません。

初投稿ですが、御手柔らかによりしくお願いします> ( \_ \_ ) <

それは、一つ上の姉のビィと共に侍女に絵本を読んでもらっていた時のことだった。侍女に読んでもらっている物語はごくありふれた冒険物だったけれど、それでもわんぱく盛りの姉にとってはたいへん心の弾むものであったらしく、ビィは今すぐにも冒険に繰り出さんとばかり侍女の話す物語に聞き入っていた。

僕はそれに気付かないふりをしていた。そして物語が終わると同時に逃げる用意も万全だった。なぜならこの姉ときたら、僕がどれだけ嫌がろうが首に縄をひっかけてでも連れて行こうとする人だから。だから僕は物語が終盤に差し掛かると同時に用事を思い出したふりをして立ち上がった。ズボンについた草を払って、少しわざとらしく伸びる。そしてそのまま屋敷へと戻ろうとしたのだが、僕にとって悪魔の物とも言うべき小さな手が、肩にしっかりと触れてしまったのだった。

「ラズ、あれ見て、あれ！」

予想通りその手は姉のビィの物であったが、彼女の表情は僕の予想と違い、何やら驚いた様子で視線を僕ではなく庭の隅に向けている。

それを追って目を庭の隅に向けると、そこにいたのは。

「……………」

親バカで僕ら姉弟を猫かわいがりする父。呑気で少しばかり天然な母。そして破天荒な姉。こんな三人に囲まれていても、この屋敷の次期当主として、僕は常識人であろうと努力する日々を送ってきた。この今までの日々が僕に、この光景を認めさせようとはしない。「あー…」と、そうだ。僕、今日宿題があるんだった。というわけで、失礼するよ。」

「ちよっと、ラズ！ごまかしてんじゃないわよ！あれを見てってば！」

片手をあげ、颯爽と駆け出そうとする僕の襟首は見事つかまれ、  
ビィの声が耳にキンキンと響く。この姉から逃げられた試しがない  
のはなぜなのだろう？

諦めて視線を姉のいうアレに向ける。そこにいたのは、赤いチエ  
ックのジャケットに茶色のショートパンツの少年だった。僕と同一  
年ほどに見える少年は、顔と同じくらいの大きさの時計を首にかけ  
ているが、それだけなら僕だって見て見ぬふりをしたりはしない。  
問題は彼の頭の上だった。彼の髪は銀というよりも白だった。そし  
て、その白い髪の上に、同じ色の長い耳が生えていたのだ。まるで  
ウサギのような。

「……僕は警備に変質者がいたって伝えないといけないから、離し  
てくれないかな……？」

「何言ってるの？あれは白ウサギさんよ！」

どう見ても白ウサギではなく、耳をはやした変質者だ。

「ビィ……。君はもう十二になるんだよ？現実をみるべきだ。あれは  
ウサギさんなんてかわいらしいものじゃ……。」

「あーウサギさんが行っちゃう！追いかけるな！」

「……大体君は自覚が足りなさすぎる。ノクターンの名に恥じない  
レディとして行動を改めるべき……あれ？」

いつものお説教モードに入っていた僕の前に、ビィはいなかった。  
ものすごく嫌な予感がして、目をアレに向ける。断じてウサギにで  
はなく変質者に向けてだ。

「待って！ウサギさん！」

この姉に関しては嫌な予感ほど当たるものだ。ビィはワンピース  
の裾が翻るのも厭わず、アレの元へと駆け出していた。

「……………ビィ……っ！」

迷ったのは一瞬で、僕は駆け出していた。あの姉に振り回される  
のは僕の役目なのだから。

数歩先でビィは芝生の地面を見下ろしていた。あの変質者が転び  
でもしたのだろうかと思いつつ、僕はビィの腕を強く掴む。

「ビィ、いい加減に……っ！」

「あ、ねえ、ラズ！あのウサギさんね、この穴に入ってっちゃったんだけど……。」

「君は相変わらず人の話を………穴……？」

ビィの足元にはありえない大きさの穴があった。直径は僕の身長以上あって、底も暗くて全く見えない。試しに放つてみた小石が底に着く音も聞こえなかった。

「こんなものがうちの庭にあるはずがない。ビィ、危険だから少し下がって。」

「でもね、ウサギさんは入っていったのよ？ぴょんって。」

「……それは彼がウサギだったからだよ。僕らは人間なんだから入るわけにいかないよ。」

これは決してアレをウサギと認めたわけではなく、ビィを説得するためと言った言葉だ。

「とにかく、警備と父さんに連絡しないと……。」

「とにかく、ウサギさんが入っていけたなら私たちが入れないわけがないわね！」

僕の言葉とビィの言葉が重なる。だからこそ、僕にはビィを止めることもできなかった。

「えいつ」

それはなかなかにかわいらしい掛け声だったが、引かれた腕に意識が集中していた僕には、そう思えるほどの余裕はない。

「ビィのバカアアアア！」

僕の叫び声は、その深い穴には良く響いた。

気がついたとき、草の良い匂いがした。まぶしい光に照らされて、視界が開くまで時間がかかったが、あの穴に入るという非常識極まりない事態が夢だったのだと思えた。僕としたことが、あんな幼稚な夢を見るなんて。

「僕もまだまだ次期当主として自覚が足りな……。」

「起きて、ラズ！すごいわ！」

遠くから聞こえるビィの声で、完全に意識が覚醒する。

屋敷の庭の芝生の香りだと思っていた草の香りは、目の前に広がる森の木々の香りだったらしい。空を見上げて穴などなく、快晴といえるほど澄んだ青空だった。

「……ビィ！」

今にも走りだしそうなビィをなんとか留める。すごく瞳がキラキラしているのは間違いなく気のせいではない。

「すごいわ！あの穴がこんなところに通じているなんて！ああ、このまま進んでいけばお菓子の家でもあるんじゃないかしら！」

「あるわけがないから。あんな穴があったこと自体おかしいことなのに、底が森になっっているなんて、わけがわからない。動かない方がいいよ。」

両親ならきつと迎えに来てくれるはずだ。しかも屋敷の庭からきたのだから、動かない方が絶対にいい。落ち着きなく辺りを見渡すビィに、冷静に言ってみたものの、まったく聴く耳を持ってもらえない。

「ほら、早く立って、ラズ！早くしないとウサギさんを見失っちゃうわ！」

そう言っただけでビィは脇目もふらずに走って行ってしまった。

「ああ、もう！ビィはいつも……。」

文句を言いつつ、僕は自分の口角が小さく笑みを作っていることを自覚していた。いつも僕を連れまわしてはトラブルを起こすビィに懲りずにいつもついて行く僕だってまだ十一の子供なのだ。

「飽きちゃった。」

ぼつりとつぶやいて、ビィはその場に座り込んだ。あれから数時間、僕は当てもなく森の中を歩き続けていた。喋る動物が出てく

るわけでもなく、ましてお菓子の家が出てくるはずもなく、この森は至って普通の森だったのだ。ビィでなくても飽きてしまうほどに「行くって言ったのはビィじゃないか。……それにしても確かにあまり歩くのも賢いとはいえないか……。」

ビィの隣に腰掛ける。口にしたりはしないが、僕だって飽きてきていたのだ。

「ウサギさんもないし……なんで来ちゃったのかしら。」

「ビィが来たがったんだから文句言わないで。やっぱり最初にたどり着いたところまで戻るべきかな……。」

カサリと、僕がこれからの行動を思案していた時、脇の木が小さく揺れた。ここは森で、動物でもいるのは普通だろう。それがシカやリスや……ウサギなら問題はない。しかしもし、それがクマや野犬だしたら話は別だった。

「もしかして、さっきのウサギさん？」

「それならなおさら後ろに下がるべきだよビィ。」

仮にも大事な姉を変質者に近づかせるわけにはいかなかった。

大きく木が揺れた。その途端に僕の目の前に真っ白な髪と、長々しい耳が飛び出した。

「ウサギさんっ！」

ビィの嬉しそうな声を無視して、アレは僕らの脇を掠め、走り去る。安心半分、焦り半分。僕はそれを呼びとめようと決めた。ここがどこなのかわからない以上、少なくとも話が出来そうな生き物を見逃すわけにはいかなかったのだ。しかし……。

「ウ、ウサ……？」

あれは本当にウサギなのだろうか？ なんていつて呼びとめれば、アレは立ち止まってくれるのだろうか？ 悩んでいるうちにウサギの背中では小さくなっていく。「はあ……っはあ……早く行かないと、女王陛下がお怒りだ……っ」と独り言をつぶやきながら。

「待て待て！ ウサギ！ 今日の晩御飯はウサギ鍋だ！」

「待て待て！ 白ウサギ鍋！」

未だにあれを何と言って呼びとめればいいのか考えている僕の耳に、聞き慣れない声が二つ届く。振り返ると、僕らには目もくれず、二人の少年が走り去ろうとしていた。

「ねえ！」

彼らはビィのたった一言で立ち止まった。なるほどそう言えいいのかと僕は心に刻みつける。難しく考える性格も考えものだった。「なんだい？僕は忙しいんだ。」

「そうだよ。ウサギ鍋が逃げちゃうんだ。」

彼らは双子だった。年はウサギや僕らと同じほど。同じ色の白いシャツに群青のショートパンツ。それにサスペンダーまで同じ色で揃えていて、黒い髪や金の瞳まで同じ色だ。まるで鏡の前に立っているかのように思えるほど、彼らは似ている。発言を見る限り性格も同じのようだ。

「私たち、迷子なの。この辺りにお菓子の家はないかしら？」

ビィの質問に双子たちは互いの顔を見合す。僕でさえ何を言っているのだと思うのだ。初対面でこう聞かれては戸惑うのも当然だろう。

「お菓子の家なんて探しているの？辞めた方がいいよ。アリまみれでとても食べられたものじゃない。」

「ハチがハチミツもかけていったからクマも集まっているよ。あいつら意地悪だから分けてなんてくれないよ。」

「アリまみれ？なんて気持ち悪いの！そんなのいらないわ！」

.....。

「待って.....あるの？お菓子の家が.....？」

なぜか三人の会話が成立してしまっていた。まともなのは僕だけなのだろうか.....。

「あるさ。でも僕ならあんなお菓子を食べようなんて思わないね。

賞味期限って知っているかい？」

「あれはいつから建っているのかわからないんだ。とっくに腐っているよ。」



双子たちには僕らのほうが常識のないように思えるらしい。納得はいかないが、僕はそれに気付かないふりをして質問を続ける。

「……………そうなんだ。ところで、ここがどこだか君たちはわかる？」

「どこって、森だよ。」

「森以外のどこだって言うんだい？」

「森に決まってるじゃない。ラズつたらわかりきったことを聞くんだから。」

ねー。と顔を見合わせる三人。ノクターン家嫡男としてのプライドがズタズタにされた気分だった。

双子は僕とビイを見て、互いに顔を見合わせる。そして大きく頷きあつた。

「君たちは迷子なんだよね？案内くらいならしてあげなくもないけど……………」

「僕たちの出す条件をのんでくれるなら案内してあげる。」

双子は同じ顔に同じ笑みを浮かべて僕らを見つめる。条件と聞けば簡単に頷けるわけもなく、僕はわざとらしく腕を組んで考え込んだ。

「その条件……………」

「いいわ。その条件のんであげる！」

その条件とは？そう尋ねようとした僕の声を遮って、ビイは簡単にそう言ってしまった。

「……………待つて。ビイ、頷くのはきちんと条件を聞いてからにしないと……………」

「「じゃあ契約成立だね！」」

またしても僕の言葉は遮られ、双子たちとビイはお互いに握手を交わしていた。まるで僕なんてこの場に存在していないんじゃないかってくらいの放置状態だった。

「それで、条件っていうのは？」

ビイの遅すぎる質問だった。

双子たちは再びお互いの顔を見合わせ、にんまり笑う。そして僕

にとつてはかなり難題といえる条件を軽々と口にしたのだった。

「僕らの友達になってくれるならいいよ！」

「私は、ヴィオレッタ・ノクターン。ビイでいいわ！」

ノクターン家のレディらしく、ビイは二人にお辞儀する。貴族のレディがする礼だ。それにだけは少し安堵した。

「……ラザフォード・ノクターンと申します。親しい方たちからはラズと呼ばれています。」

「あら、ラズったらお友達に対してなんて硬い挨拶をするの？もつとかわいらしくすべきだわ！」

胸に手を当て、父の知り合いにする時と同じように丁寧な挨拶をしたのだが、ビイはそれが気に入らなかつたらしい。姉らしく説教してくるが、普段し慣れないせいかなんとも説得力がない。

言い争う僕たちをしり目に、双子も自己紹介を始めたのだが……。

「僕はトウアイドル・ディー！」

「違うよ！今は僕がディーだ！」

「あれ？そうだっけ？なら僕はトウアイドル・ダム！」

「でももう交代の時間は過ぎてるかも。僕がトウアイドル・ダムだよ！」

双子はどちらかがトウアイドル・ディーで、どちらかがトウアイドル・ダムというらしい。しかしなぜか交代の話が出てきて、今はどちらがどちらなのかで揉めている。こういつてはなんだが、先ほどのこの兄弟に常識を疑われたのかと思うと、やはり納得がいかなかった。

「なら私が決めてあげるわ。あなたがディーで、あなたがダムね。」  
当然のようにビイが二人のどちらかとどちらかと決めてしまった。そもそも双子とはいえ名前を交代というのはしてもいいものなのだろうか……。

双子もまさか初対面の少女にそうきめつけられるとは思っていない

かつたらしく、またも顔を見合わせている。しかしすぐにまた笑顔になり……。

「君がそういうなら僕がディーだ。」

「うん！僕がダム！」

満足そうなビイト、ディーとダムの兄弟。だんだんと自分の常識が蝕まれていく気がした。

この後、数回双子たちのいたずらでシャッフルが行われ、どちらがディーでダムなのかはまたわからなくなってしまった。

双子の調子外れの鼻歌を聞きながら、どれくらい歩いたことだろう。もしかしたらビイト二人で歩いていた時よりも長く歩いているかもしれない。僕としたことが、もっとも重要な質問をしそなたのだ。

「……………どこに向かっているの…………？」

どこに行きたいのかも聞かず、双子は当然のように歩きだしたのだ。てつきりどこか迷子にふさわしいところでも知っているのかと思っについてきてみたものの、数時間近く歩き続けていると、やっぱり不安になる。

しかし双子はさも当然のように、声をそろえる。

「さあ？僕たちはこの道を歩いているだけだからね。でもきつとどこかに繋がっているよ。道があるんだから。」

道の定義がわからなくなってしまった。

「そうよね。目的地を決めるなんてもつたいないわ！お菓子の家があるような森だもの。他にもいっぱい不思議があるに違いないわ！スキップをしそうな勢いのビイトを目でたしなめる。もちろん効果は薄いけど、それでもスキップだけは阻止出来たようだった。

「ビイトの言う不思議ってどんなこと？」

「お菓子の家が不思議なら、なんでも不思議になっちゃいそうだね。どんな不思議が見たいの？」

口到人差し指をあて、ビィは歩きながら考えている。一体何を言  
い出すのやら、あまりおかしいことを言い出さないでほしいものな  
のだが。

「やっぱり小人さんかしら？宝石掘りの小人さんのおうちに住みた  
いと思っていたの。」

もはやどこに突っ込んでいいのやら、見て見ぬふり、聞き聞かぬ  
ふりをすべきか。僕は小さくため息をもらす。

しかし双子には心当たりがなかったのか、声をそろえ、首も同じ  
動きで傾げている。

「小人さん？それって、ラズみたいな大きさの？」

「僕は小さくない。まだまだ成長途中なだけだ。」

「ラズよりも小さいの！このくらい！」

僕の言葉を見無視し、ビィは手を膝にあて　ビィの腰ほどだから、  
およそ七十センチほどだ　まるで見たことがあるかのように言う。

「小人は見たことないね。」

「うん。小人はいないね。」

ビィの説明を聞いて、少し残念そうに言ったあと、双子はまた顔  
を見合わせ、とても元気よく言った。

「でも大アオムシならいるけどね！」

後ろで何かがうごめく音がした。

昔、大きな花束をもらったことがある。あれは僕のバイオリンと  
ビィのピアノのコンサートでのことだった。カラフルな花束にビィ  
は大喜びで、それをすぐに自室のベッド脇に生けさせた。その夜だ  
った。部屋数も三十ではきかないだろう屋敷の隅から隅にまで、ビ  
ィの悲鳴は響き渡る事件が起こった。ビィのベッドに、ある数セン  
チほどの生き物が乗っていたのだ。

それ以来ビィは、アオムシが大の苦手である。

「きゃ　　っ!!」

「ビィ、待つ……………」

顔を青白くしたまま、ビィは双子の片割れの手を掴んでものすごい勢いで走って行った。伸ばした腕がむなしく虚空をつかむ。

僕たちの後ろにいたのは、双子の言うとおり、大アオムシだった。しかもキセルを吹かせて、生活に疲れた顔をしている。つまり人面アオムシだ。特大の。

ビィでなくても逃げ出したくなる、出で立ちだった。そして大アオムシは聞こえるように大きく舌打ちし、これだから女は……。と呟き、去って行った。なんとも傷ついた表情を残して。

そして僕らは別れ別れになってしまった。

「とにかく追いかけないと……………」

ビィはあれで逃げ足がものすごく速い。そしてここは名も知らない森の中だ。ここで追い付けなければ、もう二度と会えないかもしれない。

「ビィも女の子なんだね。やっぱりあんなしょぼくれたおっさんアオムシに後ろに立たれたら悲鳴もあげたくなるか。」

妙に納得している双子の片割れの腕を掴み、僕は走り出した。

「あ、ラズ！そっちには行かないほうが……………」

珍しく慌てた声に足を止める。しかし時すでに遅く、僕はソコに足を踏み入れていた。

森のほんの少し開けた場所に、森に不似合いな長いテーブルが一つ、真っ白なテーブルクロスをかけられ、置かれていた。その上には貴族が使うような豪華なティーセットに三段のケーキスタンドがあり、オレンジの髪の上の頭に、白ウサギと同じような耳をつけた少年と、顔より大きなシルクハットのせいでその顔が口しか見えなくなってしまう少年　顔が見えないのでおそらくはだが

の二人が腰掛けていた。

「おやおやおや？お前はトウィードル兄弟の片割れじゃないか。こっちは……ダム！ああ、いやデイーか？どっちでもいいや！見ないうちにすっかり顔が変わっちまって！ああ、いやその顔も悪くはないさ。見分けがついてよかつたんじゃないか？いやいやいや、僕は昔のほうが良かっただなんて毛ほどもおもちやいないよ。たとえ顔が変わっちまって、双子を名乗るのは君たちの自由だ。さあ、顔変わり記念パーティーによろこそ！特製の紅茶を君たちにふるおうじゃないか、ダム！あ、いやデイーか？どちらでも構わないさ、どちらを名乗ろうとも、僕にはどちらでも変わらないからな。さあさあさあ！座った座った！」

シルクハットの少年は僕を見て一気にまくしたて、それを聞いたオレンジ髪の少年が呟く。

「顔変わり記念パーティー……？さっきまでは僕の歯が抜けた記念パーティーだったのに……。うう……僕の記念なんて次にいつ行われるかわからないのに……。歯も痛い。心も痛い。僕は親友だと思っていたのに、そう思っていたのは僕だけだったのかい、帽子屋よう……？それにそいつはダムだよ……。いい加減覚えてあげろよ……。脳みそが空なのはわかるけどさあ……。それともお前の脳みそは紅茶で出来ているのかい……。？ああ……。それなら納得だ……。さあダム、こいつの脳みそを割って美味しい紅茶を飲もう……。？」

後半は主に悪口だった。そして僕はダムだっけ？

「僕はダムじゃないっ！」

危うくダムだったのかと納得してしまいそうだった。

「ならデイーだな！」

「デイー、紅茶を飲むためのトンカチを持っているかい……。？」

「デイーでもダムでもない！僕はラザフォード・ノクターンだ！」

「ラザフォード？君がああのラザフォードかい！なっつかしいなあ、どれくらいぶりだ？1秒前か、2秒前か？なら再会記念パーティーにしなきゃ！さあさあさあ、座って座って！数秒ぶりの再会をみなで

祝おうじゃないか！」

「……数秒ぶりってなんだよ……つまりは初対面ってことじゃないか……そんな記念より、僕の歯が抜けたことのほうがよっぽど記念パーティーにふさわしいのに……。」

陽気すぎるほど陽気にティーカップをセッティングするシルクハットの少年　帽子屋と、この世の終わりに直面したかのような哀愁漂う表情でティーポットを温めるオレンジ髪の少年。全く対極な二人だった。

「……い、いらないよ！誰が帽子屋と三月ウサギのパーティーになんて参加するもんか！」

茫然とこの二人を見る僕の腕を、今度は双子の片割れ　わかりにくいからディーとする　が引つ張る。しかしその反対の腕を帽子屋とオレンジ髪の少年　三月ウサギが掴み、引つ張る。　も　うアレがウサギということに関しては突っ込まないことにした。

「まあまああ、そう言うなよ、ダム！あ、いやディーだっけ？

「ラザフォード……。」と三月ウサギがフォロー　ラザフォード！僕らの紅茶はこの森ー美味しいんだ！ぜひ親友の君にも飲んでもらいたい！いやいやいや、君が嫌というはずがないのはわかってるよ。しかし、そこにいるディーだかダムだかは僕らの紅茶が気に入らないらしくてね。何度誘ってもうまいこと逃げられてしまう！ああ、なんて親友がいないやつらなんだろう！あああ、わかっている！彼らはほんのちょっぴり照れ屋なだけさ！」

右腕が引かれる。

「誰が照れ屋なもんか！あんなものを飲んでる友達なんていないよ！」

左腕が引かれる。

右へ。左へ。また右へ。その間も二人の言葉の応酬は続いている。「わ、わかったから！飲めばいいんでしょ、飲めば！」

たかが紅茶だ。そう思った。ディーは紅茶が嫌いらしいが、僕はどちらかと言えばミルクティーには少々うるさく、この森ー美味し

いと自負されるものならば少し興味がひかれた。

「だ、だめだよ、ラズ！帽子屋の淹れる紅茶は……。」

「そうだろうそうだろうそうだろう！やはり君は味のわかる男だと思つたよ、ディー？あ、いやダム！さあさあさあ、パーティーの始まりだ！ディーも座つて座つて！あ、いやダムか？」

ディーの言葉を強引に押しのけ、帽子屋はまくしたてる。どうやら僕の名前を覚える気はないらしい。そしておとなしく席についた僕の耳に、信じがたい単語が入った。

「嫌だね！あんな泥水紅茶、飲めるはずがないよ！」

「……………泥水？」

ディーが席につかずにいるのにも構わず、三月ウサギは僕の前に置かれたティーカップに琥珀色の液体を注いだ。しかし、それは紅茶というにはなんだかとても……。

「……………濁つてる…………。」

「何をいうか、ディーだかダムよ！これは泥水じゃないさ、きちんとして過した泥水だ。うーん、なんとも良い土の香りが残っていてこの森らしさが詰まっているとは思わないかい？この美味しさがわかるのは、まだ三月ウサギだけなんだ。しかしこいつは味覚オンチなところがあつてね。君が美味しいと言つたらこの紅茶をこれから世界一の紅茶ということにしよう！」

帽子屋は泥水入りのティーカップを鼻に近づけ、なんとも芳しい香りをかいだような表情をしている。自分が味覚オンチであるとは思わないらしい。嗅覚オンチでもあるようだ。

ちなみにもろ過装置とは泥水をそのまま筒に通してポットに注ぎ込んだだけだった。

「……………わ、悪いんだけど……………少し体調がすぐれないから今日のパーティーは欠席させてもらうよ…………。」

一度は行くとつた以上、断るには相応の理由が必要だ。考えた末に思いついた理由が仮病だったわけなのだが……。

「おやおやおや、それはいけない。ならここでゆっくりしていくと



いい。ベッドはないが椅子ならあるからね。それに美味しい紅茶とケーキがあれば体調なんてすぐに良くなるさ！」

帽子屋にとって紅茶は万病の薬らしかった。

このまま、僕はきつとこのパーティが終わるまでこの場を離れることができないのだろうと悟った。ディーだけはいつまでも僕が席を立つのを待っていてくれた。

ああもう、思い出すだけで背中がむずむずしてくる。あの、青い体 正確には緑 はもう二度と見ない！ええ、絶対に二度と！

私は掴んだ誰かの腕をきつく握りしめて、そう誓った。すると、掴んだ腕の主が相変わらず呑気に口を開く。

「さすがビィは来た道を覚えているんだね。ただ闇雲に走ってたわけじゃないんだ！」

「そ、そうよ！決まっているじゃない！」

実のところ、まったく覚えていなかった。先ほど双子が言った通り、道を歩いているだけにすぎないのだ。

これはいつもラズに頼りきりだった罰だろうか。自分が頼りな状況になったことなど今までに一度もない。これからどうすればいいのかも私にはまったく見当もつかなかった。

「ねえ、そのかわいなお嬢さん。」

半分泣きそうになっていた私の耳に入ったのは、今まで聞いたこともないくらいの良い声だった。しかもかわいいと来れば自分以外に対して以外であるはずがない。

「あら、わたしのこと？なにか御用かしら？」

だから私は今まで挨拶した中でもかなりお上品にその声の主へと返事をした。それを見た声の主はにんまり笑う。それは猫耳をつけた青年だった。木の上で寝そべり、なんとも危険な状態で私たちを見下ろしている。ピンク色の猫を見たのは初めてだったが、猫の耳をつけていて、長い尻尾が揺れているのだ。猫以外の何者でもない

と思う。げつという双子の片割れ　　おそらくはダムだ　　の声が聞こえた。

「そうそう、君のことだよ。かわいいお嬢さん。こんなところで君のように愛くるしいお嬢さんが何をしているのかな？」

わざとらしいくらいのほめ言葉なのだが、落ち込んでいた私の気分を浮上させるには申し分ないものだった。

「弟を探しているの。この子の双子の兄弟も一緒のはずなのだけけれど、ご存じないかしら？」

「ああ、それなら知っているよ。でも今どこにいるのかは知らないな。さつき見かけただけ。でもご存じないかって質問には答えられるよ。答えはご存じある、だ。何かおかしいかな？」

「……いいえ。でもあなた変わっているのね。」

「ビィ、こんなにやけ顔のチェシャ猫なんて放っておいて、早く二人を探そう！」

ダムが慌てたように叫ぶ。どうやら彼の名前はチェシャ猫というらしい。なんていい猫なんだろう。ぜひうちに来てもらって、毎日その良い声でほめ続けてもらいたい。

「ああ、僕の名前はチェシャ猫だよ。そのちっさいのはトウイードルの片割れだね。こんなかわいらしいお嬢さんを独り占め？」

「別にかわいいから一緒にいるわけじゃないよ、お前と一緒にするな！ビィは僕の友達だ！」

「友達？友達ならばくらは友達だろう？君たちのような子供の相手をする気はないけど、お嬢さんが一緒なら話は別さ。さあ、友達の友達は友達。仲良くしようよ、お嬢さん？」

にまにま笑って、チェシャ猫が言う。チェシャ猫とはよく言ったものだ。

「ええ、もちろんよ。私はヴィオレッタ・ノクターン。ビィと呼んでくれると嬉しいわ。」

丁寧にお辞儀をして、レディらしく微笑むが、ダムは慌てた様子で私の前に立ち大声で言う。

「ダメだよ！こいつはあの女王の手下なんだから！女王は女が大嫌いなんだよ！」

しかし、そのダムと私の間に、木の枝から飛び降りたチェシャ猫が割って入ってくる。

「そう、よろしくね、ビー？ああ、でも非常に残念だ。僕はその双子と違って君と共に冒険することは出来ないから。」

「え？」

顔だけににんまり、しかしチェシャ猫の目は笑っていなかった。

「ヴィオレッタ・ノクターン。君の冒険はここで終わりだよ。」

泥水紅茶は未だにティーカップに並々注がれている。期待に満ちた表情で帽子屋が見つめてくるが、構うつもりはもはやなかった。唯一の救いは、ケーキがまだ食べられるものだったことだろう。パーティーが終わるまで、なんとかケーキだけで乗り切ろうと、フォークでケーキを小さく切り、口に運ぶ自分の行動がなんともむなしかった。

その時だった。遠くから笛の音と共に大勢が行進する足音が聞こえ出したのは。

それに気付いた僕を除く三人は心底嫌な顔をして　帽子屋も嫌な顔をしていそうな雰囲気醸し出していた　音のする方に顔を向けた。

その足音と笛の音は、トランプ柄の帽子と服を着た少年たちの物だった。みながみな同じ顔をしていて、双子がさして珍しいものでもないような気がしてくる。その中で、一つのスピード　つまりはスピードのエース　の入った服を着た見覚えのある白い耳のウサギの少年が、僕たちの前に歩み出てきた。

「君がラザフォード・ノクターンかね？」

なんとも偉そうな、少年にはあまり似つかわしくない口調だった。しかし自分もなんだか年齢に似合わない行動をとることのほうが多い気がする、彼のことはいえなかった。

「え、ええ。ぼくがラザフォード・ノクターンと申します。あ、あなたは……？」

この冒険の諸悪の根源はビーであるが、彼女をここに結び付けたのはこの白ウサギ少年である。名前くらいは伺いたいものだった。

「私は白ウサギ。女王陛下の命により、ラザフォード・ノクターンを城へと連行する。」

心の一切もっていない、白ウサギの言葉だった。しかし今は彼の感情こもった言葉が聞きたかったわけではなく……。

「連行……？」

少なくとも僕はここにきて何か悪を働いた記憶はない。少なくとも僕は。客人に泥水を差し出す少年たちを差し置いて、僕が連行？「女王陛下直属の命である。さあトランプ兵たち、この者をハートの城へ。」

後ろに控えていたトランプ服の少年たち　トランプ兵　が、僕の方に手を伸ばしてくる。反射的に身を引いた僕の前に、ディーが割りこんできた。

「ラスは僕の友達だ！あんな狂った女王なんかラスを渡さない！さっさと帰れ！」

成り行きでなったような友達という関係だったが、それでもディーは女王の部下であり、少なくともかなりの身分だろう白ウサギに向かっている。身分上、本物の友達というものを知らない僕にとって、この時抱いたのは新鮮な気持ちだった。

ディーを危険に晒せないという。

「僕が行けばいいんですか？」

椅子から立ち上がり、僕は白ウサギの目をまっすぐに見て言った。驚いたディーの表情も視界の端に映る。

「ラス、だめだよ！女王はこいつらよりも気が狂ってるんだ！」

こいつらといって指されたのは帽子屋と三月ウサギだ。それだけで、その女王がかなり変わった人物なのだと確信できる。

「大丈夫だから、ディーはここで待ってて。僕は何もしてないんだから、すぐに戻ってこられるよ。」

「僕はダムだよ。」

……………ダムの言葉を無視して、僕は白ウサギの元へと移動した。後ろでまだダムが叫んでいたが、トランプ服の少年たちに押さえつけられていて、僕の方へは来れないらしい。

ダムを安心させるよう小さく微笑んで、僕は白ウサギの行軍と共にそのパーティ会場を後にした。

「お前がラザフォード・ノクターンか？」

真っ赤な口紅の綺麗に塗られた唇から出た言葉はおそらくここにいる全ての者を威圧する。

今、僕は白ウサギに連れられてやってきたハートの城の大広間で、城主である女王陛下の前に立っていた。黒い短めの髪に真っ赤でたくさんのハートが描かれているドレスを着た女王陛下は、僕が今まで見たどの人間よりも整った顔をしていて、それはまさに造形物のようだった。ただ一つ問題があるとすればそれは……………。

「は、はい。じよ、女王陛下……………？」

「ああ、お前はなんと美しい顔をしているのだろう。ワタシが見込んだ通りだ。」

女王陛下はうつとりと僕の顔を見つけてきて、背筋に何か嫌な汗が伝う。これで絶世の美女に見つめられたとなれば僕だって男なのだから顔を赤くするなり反応を示せるだろう。しかしいくら美しいといっても彼に見つめられれば、顔面を赤くではなく白くしてしまうのは仕方ないことなのだと思う。

女王陛下は、女装した国王陛下だったのだ。

しかも女王陛下は僕を見つめるだけで何も言っていない。恍惚と

した表情で、僕を見つめるだけだ。ものすごく居心地が悪い。

「あ、あの、それで、僕が何か……？」

あまりの静けさに耐えきれず、恐る恐る質問する。女王陛下の様子から、僕が何か罪を犯したようには思えないが、見つめるためだけに呼び出したわけではないだろう。

「ああ、そうだ！お前には見せてやろう。ワタシの美しいコレクションたちを！」

僕の質問が聞こえていなかったのか、女王陛下は手を叩き、白ウサギが広間を後にする。コレクションを見れば返してもらえるのだろうか。ダムの言う通り、あまりまともな人ではないらしい。見た目も中身も。

そして白ウサギがトランプ兵を引き連れ広間に戻ってくると、女王陛下は玉座から降り、僕を白ウサギたちが持っている箱へと向けさせる。肩に置かれた手の、マニキュアのあまりの赤さに少し寒気がした。

「これがワタシのコレクションたちだ。見せてあげたのはお前が初めてだよ。」

これを見れば帰られる。そう信じて、僕は白ウサギの持つ箱を見つめた。

白ウサギが箱を開け、トランプ兵もそれに続いた。

「っ！」

声にならない悲鳴。目の前には金の髪と青白い顔。そして滴る赤い血。

「今のお気に入りはこの子だったのだけどね。お前のほうがこの何倍も美しいよ、ラザフォード・ノクターン。」

女王陛下のコレクションは、美少年の生首。それを理解して、女王陛下の僕を見る目が新たなコレクションに歓喜しているのを知った。

「ふふ、お前はこの子たちの何倍もかわいがってあげよう。飽きるまでベッドで共に寝てあげてもいいし、美しい髪飾りで着飾ってあ

けてもいい。お化粧もしてやろう。ああ、美しいラザフォード・ノクターン。お前がここに来たことにだけはあの娘に感謝せねばならぬ。」

そつと首をなでられ、女王陛下を振り払う。初めて見た生首と、自分のその姿を想像し、胃液が逆流しそうになる。もつれる足でその場を逃げようとするが、もちろん逃げられるはずもない。

すぐにトランプ兵たちにとらえられ、頭が女王陛下の前に差し出されてしまった。

女王陛下は手に大きな斧を持っていた。処刑人が持つような、首でもバターのよう簡単に切れそうな大きさだ。薔薇の彫刻が彫られた刃は綺麗に手入れされているのか、まるで新品のように光る。「いつもは白ウサギにさせているのだけれど、お前は特別だ。ワタシがこの手で、美しい首だけの姿にしてあげる。」

それがご褒美であるかのように、女王陛下は微笑んだ。

彼の華奢な腕が斧を後ろに振りかぶる。

かちやりと。それは極めて静かな音だった。広間の大きく豪華な両開きの扉が大きく開かれる。そこから伸びる赤絨毯の中央を、左右に双子の少年たちをつれたワンピース姿の少女が歩く。

「ビー……。」

たった数時間ぶりなのが、一生よりも長く会っていないように思えた。

ビーの後ろにいたピンクの髪と猫の耳をした少年が、広間の隅にまで聞こえるほどの大きな声をあげる。

「ここに、新たな女王の即位を宣言する！チェシャ猫はここに在らせられるヴィオレッタ・ノクターンを、新たなハートの国の女王に宣言する！」

「なっ……！？」

女王陛下の派手に化粧が施された瞳が大きく見開かれる。彼の手から大斧が滑り落ち、広間中にその鈍い音を響かせた。

トランプ兵たちのざわめきが徐々に大きくなっていく。ただ一

人の猫耳青年の宣言に、そこまでざわめくのは何故だ？

「静粛に。」

白ウサギの一言で、騒ぎになりかけたトランプ兵たちは一斉に静まり返る。

そして白ウサギは青年と向かい合った。理由を問うているように。

それを見た青年は、にんまり笑う。

「その女王陛下は男である！よってチェシヤ猫はこの、ヴィオレッタ・ノクターンを女王陛下に任命する！」

今度こそ、本当に広間は静まり返った。いや、チェシヤ猫の笑い声だけはしっかり響いている。

そして白ウサギは頭を抱え、膝を折った。

「まさか……あの方が男……だと……っ!？」

その叫びを皮切りに、トランプ兵たちもが泣きわめき、怒りを露にする。

誰も……彼が男だとは思わなかったのだろうか……。

ここにいて、みなが落ち着くのを静かに待っていたのは、僕とビー、ただこの騒ぎに驚いていた双子と、女王陛下、いや前女王陛下だけだった。

チェシヤ猫は女王の飼い猫で、飼われる相手を選ぶ権利があるのだとビーから聞いた。

前女王陛下が無類の女嫌いで、国中の女を首なし死体にしたために、彼が男とわかっててもチェシヤ猫は他の女王を選べなかったのだという。

「まさか僕が男に飼われるなんて、拷問もいいところだろう？公爵夫人もいなくなってしまつて、困っていたんだ。」

そのチェシヤ猫の前に現れたのが、ビーだった。

「女であれば誰でもいいわけじゃないけれどね、ビーは若さも愛らしさも申し分なかった。絶対に逃がすわけにはいかないね。」

なんだかナンパの講釈を受けているような気分だが、前女王陛下



下は連れていかれ、僕が助かったのは事実だった。

しかし、ビイがこの国の女王陛下になってしまったのも事実だ。ビイの今後について考えを巡らせていると、肩を叩かれた。振りかえると、瞳に溢れそうなほど涙を浮かべた双子の兄弟がいた。

「僕、だから行っちゃダメだって行つたのに……女王は首切りが趣味なんだから、僕らだって何度も切られそうになったんだよ！」

「ここに住んでる男なら女王陛下に近づかないのは常識だよ！ ラズのバカ！」

泣きながら、ものすごい勢いで怒鳴り付けられる。

首が切られるとわかっていれば絶対に近づかなかったのだが、それでも心配してくれていたのはわかる。

「ごめん。もう絶対にしないよ。約束する。」

素直に謝ると、双子は照れたように顔を見合わせた。

「えらく双子たちがなついたね。まあそれもわからなくもないかな。君は僕の美しく愛らしい女王の弟だものね。」

チエシャ猫はビイを後ろから抱き締めて離さない。猫だと思えば可愛らしい行為だが、猫耳青年だと思えば、今すぐ引き離すべきか迷う。

「女王陛下。」

再会に盛り上がる僕たちに話しかけたのは、無表情に戻った白ウサギだ。どうやら前女王陛下が男であつた事実は乗り越えられたらしい。

「ご即位、おめでとうございます。わたくしは白ウサギ。この城の宰相でございます。」

胸に手をあて、物々しく白ウサギは挨拶する。そこでやっと、ビイがこの国の女王になってしまったのを思い出した。

宰相ってなに？ などと耳打ちしてきたビイに勤まるのかどうかは置いておくとして。

「そう、宰相さんね！」

ビイはさもわかつていたように言う。

「でもあなた、全然白ウサギらしくないわ。白ウサギはもっと可愛くないと！あなたの話し方はうちの使用人のじいよりもおじいさんみたい！」

びしつと指を白ウサギに突きつけて、ビィは女王らしく偉そうに言い放った。

「これからその話し方は禁止よ！可愛い話し方じゃないとお返事してあげないわ。」

ビィの初めての命令だった。帽子屋たちがいればきっと「ビィ女王陛下の初めての命令記念パーティー」を開催しようとしただろう。

今までそんな命令を受けたことがなかったのだろう、白ウサギは目を見開いたまま、固まっている。

「あの……ビィが無茶を言うのはいつものことですから……。」

恐る恐るフォローした僕に、白ウサギは「いや……。」ととても複雑そうに首を横に振る。

「ぜ、善処しま……。」

「ほら！全然可愛くない！そこは、ボク頑張るよ！って可愛く言うところよ！」

「ボ、ボ……ボク……っ!？」

善処するというだけで精一杯だった白ウサギはもはや赤ウサギと言っても過言でないほどに顔を赤くしてしまっている。

結局、ボク頑張るよと両手を握りしめるポーズまで付けて言うようになるまでが迷子になっていた時間よりも遥かに長かった。

「でも、女王陛下に即位したってことは、ビィはここにずっといなきやいけないのかな……。」

誰も言わない疑問を口にする。ビィも少し顔を伏せた。先程までの楽しそうな笑顔は、もうない。誰も言わないということは当然と言っことで、もうビィは父様や母様のいる屋敷に戻ることは出来

ない。そう思っていたのだけれど……。

「ビィがここにいたいのなら、ここにずっといられるさ。でも帰りたいなら帰れるよ。」

この場にいた、この国の住人たちは声を揃えてそう言った。白ウサギだけは、これをどういえば可愛くなるかを真面目に考えていたようだ。

「女王陛下の言葉は絶対なんだ。」

「だからあいつだって好き勝手にたしね。」

双子がそう言っで、そこにいたみんなが女王陛下の言葉を待つ。

ビィは大きく頷いて、満面の笑顔をみなに向けた。

「私はここにいるみんなが大好きよ。でも、おうちにいるパパもママも使用人たちもみんな大好きなの。私はみんなとずーっと一緒にいたいわ！」

わがままなビィの願い。それを聞いたチェシャ猫がにんまり笑う。

「さすが僕の女王陛下。やっぱりお願いはたくさんないとね。」

白ウサギも小さく笑っている。

「わたしもあなた様になら永遠にお仕えしたく……あ、いいえ、え……ボクもずっとビィと一緒にいられば……。」

顔が再び真っ赤になっている白ウサギを見て双子がからかうように笑う。

「僕らは友達だもん！離れたいって言われたって離れないよ！」

「せっかく会えた、気が狂ってない友達だよ！ずっと一緒にいるさ！」

その場にいたみんなが頷きあい、チェシャ猫がビィの元へと歩み寄る。

「では女王陛下、そして弟君も目を瞑って。あなたたちの大好きな者たちの元へ、お帰りください。もちろん僕らは永遠に共に。」

チェシャ猫の声は段々と遠退いていく。

「やま　　ぼっちゃま　　」

懐かしい呼ばれ方だった。自分のことだと理解するまでに時間がかかったが、それでも閉じた瞼を開き、眩しい光にまた閉じる。

香る匂いは森のものとはまったく違った。

「ぼっちゃまも、嬢ちゃまも、お昼寝ならお部屋でなさってくださいな。」

聞きなれた呆れ声に完全に意識が屋敷の庭へと戻される。

勢いよく起き上がると、僕の前には鮮やかな緑の芝生が広がっている。

僕が起きたのを確認した侍女は、続けてビイの肩を揺すっている。

「……………夢……………？」

妙にリアルだった、あの冒険が……………？今でも思い出せる、深い森に、わけのわからないティーパーティ、そして友人たちの笑い声。それらが全て嘘だとは思えない。

ビイは僕よりも緩慢な動作で起き上がり、周りを見渡した。

「ねえ、みんなはどこに行ったの？」

起き上がったばかりの寝惚け眼のビイは当然のように「みんな」と言う。それだけで、なぜだかすごくうれしくなった。

「寝ぼけてらっしゃるんですか？旦那様がティーサロンでお待ちですよ。お客様がいらしてますから……………ビイ様は鏡を見てから向かいましょうね。」

長髪のビイは髪が乱れてしまっていて、それをみた侍女は大きくため息をついてビイと僕を自室へと引っ張って行く。

自室にいたのは、昔からうちにいる飼猫のダイナだ。しかし白猫のはずのダイナは今、見る影もない色に染まってしまっている。  
「まあ、ダイナ！すっかりピンク色になられて……………ビイ様ですか？」

絵具を出しっぱなしにされたのは……ですからあれほどきちんとお片づけをなさってくださいと言っておりますのに……。」

侍女はダイナを慌てて抱きかかえようとしたが、ダイナはすらりとすり抜け、ビーの足元にすり寄る。侍女の小さな悲鳴と「ああ、洗濯物が増える……。」というかなしげな声を無視して。

「チエシャ……？」

ダイナがにんまり笑った気がした。

それだけではなかった。ビーのベッド脇には見覚えのあるシルクハットと、やや顔が下向きなオレンジのウサギのぬいぐるみが居座っていて、その下にはトランプ柄のクロスが敷かれている。

「お待たせ、ラズ！行きましょう。」

新しいワンピースに着替え、髪も結ったビーが嬉しそうに僕の周りで数回ターンしてみせる。その髪には白いウサギの髪留めをつけている。

夢じゃない。

みんなはビーと、僕と共にいる。でもまだ、一番共にいたい二人がいない。

父様はすでにティーサロンにいた。見知らぬ男性と話をされているが、すごく楽しそうだった。

「父様。お待たせして申し訳ありません。」

僕らの到着を知り、父様は席を立ち、僕らを男性の前に立たせた。男性はすごく優しい表情で僕に握手を、ビーには手の甲にキスをして挨拶をしてくれる。

父様の仕事の関係で親しくなったというその男性には僕らと同じくらいの年の子供がいるそうで、家族ぐるみで付き合いをと今日屋敷を訪れてくれたのだという。

「ほら、恥ずかしがってないで、お二人に挨拶しなさい。」

男性の後ろに隠れていた、子供たちは同じ顔をした男の子たちだ

った。

二人の顔を見て、ビィと僕はあの二人のように顔を見合わせる。

「はじめまして、ディール・ルードと申します。」

「ダミエル・ルードと申します。」

同じ動きでお辞儀する二人。彼らも共にいてくれた。

僕とビィは両手を差し出し、二人の手を取る。そして双子のように声を揃えた。

「これから、よろしくね！ディール、ダム！」

【了】

## （後書き）

×切間近に書いてしまい、とても消化不良でしたが、一応提出したそのものをこちらに投稿させていただきました。

あらゆるところで、気に入らないところ（チエシヤ猫がなぜそんな権限を持っているのか、主人公がラズである意味はないのではないのか等）ありますが、みなさんのご意見を聞いて、修正していけたらと思っています。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8129m/>

---

ワンダーランド・ファンタジー

2010年10月28日05時41分発行